



現代の台湾漢民族の祖先祭祀と宗族組織における変容 : 台湾南部五講水宗族の事例研究

劉, 梅玲

(Citation)

社会学雑誌, 18:208-222

(Issue Date)

2001-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010974>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010974>



現代の台湾漢民族の祖先祭祀と宗族組織における変容

——台湾南部五溝水宗族の事例研究——

劉 梅 玲

神戸大学大学院文化科学研究科博士課程

一 はじめに

台湾の移民社会では、東南中国のように、宗族組織が地域的集団として政治、経済といった諸側面で大きな役割を果たし、また自分と共通の先祖との関係に応じて自然にいくつかの宗教的な単位に分かれていた。本稿では、台湾南部農村の宗族組織を事例にし、祖先祭祀に注目して、このような祖先祭祀のために生まれた宗族組織の構造を明らかにする。

主として依拠するのは筆者自身によるフィールドワークの結果（一九九九年）である。調査地は台湾屏東県萬巒郷の五溝水（五溝村）という客家系の村、調査対象はその村の中で最も規模の大きいし氏宗族である。客家人は漢民族の一民系であるが、本稿においては客家人の独特な文化の解明が目的ではないので、漢民族という大きな範囲で検討

することにする。

この地域では祖先祭祀に二つの異なった形態が見られた。一つが「庁」での祖先祭祀であり、もう一つが「祠堂」での祖先祭祀である。前者での祭祀が、祖先に対する愛着あるいは尊敬の念をあらわしていたのに対し、後者では祖先祭祀を通じて宗族の勢力誇示が行われていた。

この二つの異なった形態を持つ祖先祭祀に応じて、庁レベルの宗族組織と祠堂レベルの宗族組織が生じた。前者に比べ後者は、その祭祀の目的から分かるように大規模な形態を取った。五溝水に入植した五つの同姓の宗族は、それぞれ経済の基礎が安定してから、より高い社会地位とより強い団結力を求めるために結びつく。これらの宗族は、共通の始祖からの父系出自をたどることに基づき、全体が一単位となつて、宗族組織を形成したのである。

いずれのレベルの宗族組織も大抵、共通の祭祀場所、財産を持った。台湾の漢民族社会において、宗族は中国本土

におけるように、しばしば族産あるいは祠堂を共有財産として所有している。このような共有財産は台湾で「祭祀公業」と呼ばれ（客家人は「公嘗」とも呼ぶ）、この祭祀公業を所有する族人達は祭祀公業団体として組織されている。

ところで、調査期間は二段階に分ける。まず、この宗族が台湾に入植した一七八〇年から一九四五年の台湾光復まで。この時期は、宗族組織が発達し、社会秩序、社会生活の維持に役立っていた時期にあたる。次が、台湾光復から現在に至るまでの期間である。光復後の台湾は次第に多民族的な現代社会となり、都市化と商工業化が急速に進み、農村に大きな衝撃を与えた。

以下では、宗族組織が社会変化からどのような影響を受け、現在のあり方に至るのかを考察する。

二 調査地と調査対象の概要⁽²⁾

(一) 調査地の概要

台湾は、ユーラシア大陸の東端にあり、面積約三六〇〇平方キロ・メートル、ほぼ九州の面積に相当する。人口は二四〇〇万人、行政区画は一五県、二直轄市、及び金門、馬祖島である。筆者が調査を行った五溝水は、台湾南部の屏東県に位置し、萬巒郷に属する。人口は一五四六人程度、面積はおおよそ五・二平方キロ・メートルである。土地の大

部分は水田であり、商工業はあまり発達せず、農業が住民の生業である。五溝水とは自然村を指し、行政村化してからは五溝村と称される。

五溝水は、昔の「西盛庄」、「東興庄」、「大林庄」、「得勝庄」という四つの小さな集落から形成されたという。住民の大部分をなすのはL姓、S姓、G姓の人たちである。つまり複数宗族共住型村落である。今回の調査対象となるのは、中で一番有力なL姓である。現任村長のL氏によると、現在の五溝水に在住しているL氏の族人は約四五〇人であり、L氏の族人全体の三分の二にあたる。他の三分の一は仕事などの理由で他所に転居した。

(二) 五溝水L氏宗族の移住経歴

L氏はもともと漢朝の民籍に由来を有した。数回の遷移の後、広東省東南部に住みついた。宗族史によれば、第一世の奇川公のときに始めて広東省に移住している。彼が五溝水L氏宗族成員にとつての広東開宗祖ということになる。

L氏が五溝水に來たのは一八世紀になってからである。

L氏祖先は乾隆年間（約一七八〇年）に広東省嘉應州鎮平県（今の蕉嶺県）招福郷八輪車戸から共有財産を持つて開墾に來た。L氏の中で、始めて五溝水に足を踏み入れたのは、北塘方第一〇世の連智公である。その後、愛塘方第一世の雲展公、続いて第一三世の偉芳公、偉鵬公、最後は

北塘方一五世の聲棟公の順番で台湾に来了。五人はそれぞれ「來台祖」として五溝水に宗族を創立した³。

ところで、五溝水し氏宗族の内部組織を理解するために、來台祖による結合した五つの宗族と、その連合した宗族結合との歴史を再構成する必要がある。

(三) 五溝水し氏宗族の内部構成

前述したように、はじめて五溝水にきたのは第一〇世北塘の連智公であつた。そのとき西盛庄の大部分の土地はG氏宗族の所有物であつたので、止む得ずその周辺に家屋を建造した。これがし氏宗族の最初の居住地で、五溝水では「し屋夥房」(し家の家)と呼ばれている。

次に来たのは、第一一世愛塘の雲展公である。後の子孫(英華公)は、雲展公の息子、大我公の名義で家屋を建て、位牌も作つた。そのためこの宗族は、五溝水のし氏宗族の族人たちに「愛塘大我公」という総称で呼ばれている。

「愛塘大我公」はすぐに規模を大きくし、新たにいくつかの家屋を創設した。このことを支派の「英華派下」と「應幡派下」に分けて見てみると、「英華派下」には二つ家屋(英一と英二)があり、「應幡派下」には、二つの家屋(應一と應二)がある。

愛塘の大我公について五溝水に入植したのは、第一三世愛塘の偉芳公と偉鵬公とその息子の瑞玉公で、一七八七年

の時である。最初、彼らは五溝水に居住する場所を見出せず、先に入植していた大我公のところに住んでいた。後に偉芳公が「耀隆商号」という布屋を経営して財をなし、G氏宗族の族人から六甲(二甲〓九七〇〇平方メートル)の土地と一つの家屋を購入した。

この偉芳公には息子が五人いた。五人は父親の後を継ぎ、商業に成功した。長男の廣玉公は、元の家屋の近くに新しい家屋をつくり、子孫の教育を重要視し、広東の「秀才」⁵し耀初先生を自分の子供の家庭教師として雇つた。廣玉公の長男の清元公とその長男の成金公と次男の成台公三人は、良い教育を受け、「貢生」⁶の肩書きをもらった。これは当時非常に珍しく、また名誉なことであつたため、し氏は台湾南部で有名な宗族となつた。この二代の時が五溝水のし氏宗族の全盛期である。便宜上この宗族を支派の「偉芳派下」と「廣玉派下」に分けることにする。

ところで、偉芳公と一緒に大我公の所に居住していた瑞玉公も、後に自分の家屋をつくり、そこに移り住んだ。世代の経過につれて規模が大きくなつたので、第一六世の時に、一つの家屋が増設された。この宗族も「瑞玉派下」と「清期派下」の二つの支派に分かれている。

最後に入植したのは第十五世北塘の聲棟公であるという。聲棟公は入植も遅く、また余り子孫を残さなかつたために、この宗族には家屋が一つしかなかった。

以上が、五溝水の五つの異なる來台祖による結合集団（宗族）である。五つの宗族は發展するにつれて、さらに高い社会地位と地方に対する権利あるいは影響力を求めようになる。こうして大きな宗族結合を形成するように力を蓄えて行き、その結果、同治三年（一八六四）十一月一日愛塘派の應爵公、應瑞公、そして廣玉公は北塘派の振亨公と手を組んで、祠堂「**上氏宗祠**」を創設した。そして「**開七公**」と第一世の「**奇川公**」と第六世の「**積書公**」を、五溝水**上氏宗族**全員の共同始祖として祭祀することにしたのである。

この「**上氏宗祠**」は、最も交通の便の良い場所にある。様々の事情があつて建設開始から完成までかなり時間がかつた。一九〇八年九月七日に完成し、一九二一年改築している。完成した「**上氏宗祠**」は非常に壮観な、古典風の伝統な建物である。総面積はおよそ二〇〇坪、祠堂の外側には、権力と富のシンボルとして石獅子や鳳凰の彫刻などが、後庁には、宗族の規則、正庁には祖先の写真並びに掛け軸などの装飾品が多数飾られている。

三 **上氏の宗族組織（I）——光復までの時期**

台湾の漢人移民社会に新しい地元意識が形成されるにつれて、宗族組織も發展してゆく。そして宗族組織は様々な

祖先を起点として宗族を結集し、祖先祭祀の実施と族産の創設をおこなつた。以下では五溝水**上氏宗族**の宗族組織のあり方を再構成する。

（一）**庁レベル（來台祖による結合集団）の宗族組織**
宗族集団「**北塘連智公**」の場合は、一つの庁に連智公の名前を中央にして第八―一五世の祖先位牌が安置されている。祭祀は毎日と重要な節句に行われる。北塘公、道乾公、成登公の三人は連盟の「三公嘗」を持っていた。

宗族集団「**愛塘大我公**」には「**英華派下**」と「**應幡派下**」の二つの支派があるので、別々に紹介する。

「**英華派下**」には前述の**英一**と**英二**二つの家屋があるが、位牌は**英一**の庁にしか安置されていない。この庁には大我公の名前を中央にし、第一―二〇世の位牌が安置され、毎日と重要な節句の際に祭祀が行われる。

「**英二**」の居住者は節句の時、あるいは祖先に何か報告する時などに**英一**に戻つて祭祀を行う。「**英華派下**」には祭祀公業組織**英華公嘗**がある。

「**應幡派下**」にも**英一**と**英二**二つの家屋があり、両方の庁に**應幡公**の名前を中央にした位牌が据えられている。b>英二には第六―二〇世、b>英二には第六―一八世の位牌が置かれている。毎日と重要な節句の際に祭祀が行われる。「**應幡派下**」には祭祀公業組織**應幡公嘗**と

〈冠恵公嘗〉の二つがある。

「愛塘偉芳公」にも二つの支派がある。その一つ「偉芳派下」では、一つの家屋の庁に偉芳公の名前を中央にして、第九一八世の位牌が安置されている。祭祀は毎日と節句の時に行われる。この「偉芳派下」には祭祀公業組織へ偉芳公嘗がある。

「廣玉派下」も一つの家屋の庁に、廣玉公の名前を中央にして第一三一八世の位牌が据えられている。祭祀は、毎日と旧暦の毎月一日と一五日と節句に行われ、またそれぞれの祖先の誕生日あるいは命日にもその子孫が祭祀に赴く。この宗族には祭祀公業組織へ「廣玉公嘗」と「清元公嘗」があり、その収入から、祭祀費用の他に奨学金や男子を産む奨励金なども賄われている。

「愛塘偉鵬公」の二つの支派における状況は以下の通りである。「瑞玉派下」では、一つの家屋の庁に、瑞玉公の名前を中央にして、第一一七世の位牌が安置され、毎日と節句に祭祀が行われている。「瑞玉派下」の祭祀公業組織は「瑞玉公嘗」である。

もう一つの支派「清期派下」は、一つの家屋の庁に、清期公の名前を中央にして第一一八世の位牌を置いている。祭祀は毎日と節句の際に行われる。「清期派下」の祭祀公業組織は「清期公嘗」である。

「北塘聲棟公」の場合も同様に、一つの家屋の庁に聲棟

公の名前を中央にして、第七一八九世の位牌を安置している。ただこの宗族には祭祀公業組織がなかった。

(二) 祠堂レベル(宗族結合)の宗族組織

前述してきた五溝水「氏宗族」の宗族結合形態は、具体的には「北塘」の二宗族と「愛塘」の三宗族を連合したものである。連合に伴い共通の祠堂「氏宗祠」が建てられ、族譜が連合された。四つの祭祀公業組織も連合され、当地で俗称として「大嘗」と呼ばれる共通の祭祀公業組織が創設された。その四つの祭祀公業組織は「奇川公嘗」、「積書公嘗」、「愛塘道信公嘗」、「啓慶積厚公嘗」であり、前二者が財力のある祭祀公業組織である。この「大嘗」は広大な土地を所有し、強い経済力を持っていた。

こうした大きな組織を保持するために、「大嘗」の管理人には相応の適任者が選ばなければならない。系譜的な構造から生み出される年長者ではなく、族人全体を対象に、宗族の中で最も知識と経験を持ち、威信と信頼感のある人物が選ばれた。そのため、管理人は、この宗族の族長の役割も果たし、族人の精神的なリーダーとなっていた。後述する管理委員会が発足するまでに、この管理人を務めたのは「愛塘偉芳公」、「廣玉派下」の「展紅」、また「玉堂親子」は第一任と第二任の管理人を担当した。

宗族の共通の祠堂となった「氏宗祠」の中に開七公、

奇川公、積書公三人の名前を中央に、七つの位牌が安置されている。宗族史とインフォマントによると、「し氏宗祠」の祖先祭祀の状況は次のようである。毎日の祭祀と掃除は、祠堂の中に居住する決まった族人に任せられているが、旧暦の毎月の一と一五日はその住民も一緒に簡単な祭祀を行う。最も重要な祭祀は一族の共同的祖先祭祀である。それは一九〇八年から年に二回、祠堂で行われている。春と秋に行われるため「春祭」と「秋祭」と呼ばれる。当地では、一般に俗称として「算会」と呼ばれる。「し氏宗祠」の場合は、「春祭」が旧暦の二月頃に、「秋祭」が八月、中秋節の頃に行われる。この共同的な祭祀が行われる目的はし氏宗族の社会的勢力の誇示、あるいは族人のつながりを緊密にしたり、「大嘗」の収支を公表したりすることにある。

この共同的な祭祀はし氏族人に重視され、積極的な祭祀活動が行われていた。祭祀の日に、「大嘗」の管理人は祭祀のリーダーとして全族人の先頭に立ち、その後各宗族の代表者が立ち、儒礼儀式の順序に従って祭祀が行われた。その際、他の族人は周りに立ち、一緒に礼拝した。儀式の間には中国式の楽隊による演奏が加わる。儀式が終わると、供物が調理され、「し氏宗祠」の前の広場に置かれた食卓で、訪れた族人たちにふるまわれた。食事が始まる前に管理人によって「大嘗」の収支状況が報告され、食事が終わ

ると演劇や人形劇などが行われた。とても賑やかなものであった。

このような「算会」に関わる費用は全て「大嘗」によって賄われていた。もちろん毎日と節句の時に行われる祭祀の費用も「大嘗」から支出されていた。また祖先祭祀に訪れた族人に払われる奨励金、大学に入学した族人へ支給される奨学金も、この「大嘗」によって賄われていた。

「大嘗」の収入は、所有している土地の地代からなっていた。土地を所有していない族人が「大嘗」の管理人に申し込み、「大嘗」の所有している土地から自分が耕作したい面積の土地を安い価格で借り受けるようなことがよく行われた。このような場合、祭祀公業組織とその祭田を借りている族人の關係は、地主と小作人のような關係になるが、同宗感情あるいは互恵の目的などから、地主と小作人の關係以上に融通が利く關係であった。

(三) し氏宗族と五溝水の社会關係

台湾では国家組織が未発達の時、自然に自治あるいは自衛の組織が形成された。その中心となったのは郷紳であった。郷紳は、その時代にある程度富裕になった知識人に多く、またそこから国の役人になるケースも多かった。つまり郷紳は地域と国の間の掛け橋のような存在になることもあった。地方の自治機構では、このような郷紳が重要な役

割を演じ、広範囲な活動に関心を寄せていた。中でも最も重要なものは地方の秩序維持と地方の建設などであった。実際、郷紳には経験と威信があり、指導的な役割を果たすことが可能であった。この郷紳を多く輩出したのが、**し氏宗族**である。この節では、この時代の**し氏宗族**が**五溝水**でいかなる役割をはたしていたのかをみていく。

清朝の時代、**應美公**が**武秀才**に受かった他に、前述のように、**廣玉公**の長男の**清元公**とその長男の**成金公**、次男の**成台公**三人とも「貢生」の肩書きをもらって、それぞれ官吏になった。後に**日本殖民時代**になって**成台公**は**阿猴庁**（今の**屏東県**）の参事に任官した。

一九二〇年一〇月、台湾の地方制度の改正が行われ、**萬巒庄**が設けられた。その際、**庄長**と**助役**（副**庄長**）が据えられ、「**廣玉派下**」の**安紅公**は第一任の**助役**と第二任の**庄長**を担当した。そして**助役**と**庄長**として長年優秀な業績をあげたために、日本政府から台湾人には珍しく「高等官待遇七位」を受勲された。

五溝水し氏宗族の中には、他にも二人重要な人物がいる。一人は**成台公**の息子の**展紅公**である。彼は**五溝水**の「保甲」（今の村長に当たる）を担当したことがある。また彼は「**大嘗**」の第一任の管理人であり、任期内に非常に優れた業績を残した。地方でも皆に信頼されている。もう一人は**し石開**である。彼は**日本殖民時代**の**台南師範学校**の出身

で、教育界から政治界にかけて活躍していた人物である。

以上の人々の社会地位あるいは政治地位が高かったため、**五溝水**の**し氏宗族**全体の地位も彼らの栄光、勢力によって高くなった。普段、地方で何か問題が生じた時や公共事業を創設する時、各姓の代表者からなる協議会で相談して解決を考える。その場合、社会地位が高ければ高いほどその決定権を左右できる。**五溝水**では、**し氏宗族**がこのような力を持っていた。**し氏宗族**は人口が最も多く、経済力があり、政治、社会地位も高かったのである。

「**大嘗**」の場合と同様に、「**來台祖**」による結合集団の祭祀公業組織も、その管理人は宗族の代表的な郷紳が担当する。彼らは祭祀公業組織の管理人として、自らの宗族内部だけではなく、その地方の様々なことに対して権威がある。彼らには学識があり、また宗族の祭祀公業財産の支配権を握っているからである。前述の協議会では、彼らは強い発言権を持っていた。彼らには問題を解決できる政治力があり、公共事業を成し遂げる経済力があるからである。

政治力が及ばない場合、祭祀公業組織の財力が足りない時でさえ、援助できる有力な人物を説得する影響力が彼らにはあるのだ。

以上、**五溝水**の宗族の事例から見えてきたように、当初は祖先祭祀のために創設され、互恵のために資金を提供するようになった祭祀公業組織が、**し氏宗族**の政治的な影響力

を支えていた。次の節では、国家が宗族組織にとって変わるといふ社会的変化が、祭祀公業組織にいかなる影響を与え、またし氏宗族にとつてどのような意義を持ったかを考察する。

四 し氏の宗族組織(Ⅱ)

― 光復から現在までの期間

植民時代に、台湾には現代経済体系が導入され都市も発生し、軽工業あるいは商業も発達し始めるが、殆どの地域が以前の単純な構造の農業社会であった。返還後、国民国家になって都市化と商工業化が急速に進み、農村に大きな衝撃を与えた。同時に、様々な原因、特に土地改革による財力の低下によつて、祭祀公業組織が衰退することになった⁽¹⁰⁾。ではそうした社会背景で、五溝水のし氏宗族における祖先祭祀と祭祀公業組織とその関係はどのように変化していったのであろうか。

(一) 庁レベルの宗族組織について

「北塘連智公」の場合、「し屋夥房」の庁で毎日行われる祭祀は、その住民が各世帯一人ずつを代表として行う、以前と同じような簡単な祭祀である。節句の際には、旧暦の大晦日だけ、原則的にあらゆる子孫が集まり、各世帯が

豊富な供物を用意して祭祀する。これに対して他の節句の際には、その住民だけが祭祀をするが、供物は大晦日の時とあまり変わりが無い。所有していた祭祀公業組織へ三公嘗へは戦争直前(一九三八年)に解散した。

「愛塘大我公」の場合は、二派に分かれているので別々に紹介する。「英華派下」の方は、「英二」の位牌が複製されていないので、以前と同じように「英一」の方に帰って祖先祭祀をする。毎日の祭祀は特定の族人に任せて、簡単な祭祀が行われている。節句の際には、各世帯が任意にばらばらの時間に供物を持ち寄つて祭祀する。

「英華派下」は、依然として祭祀公業組織へ英華公嘗を所有しているが、現在では土地がかなり減少し、年間収入は二万円くらいになった。この収入から墓参りの費用、建物の維持費、前述の、庁で祭祀および清掃を行う族人の給料(一年三〇〇台斤「二台斤」〇・六キロ)の米にあたる金額)とその庁の祭祀費用などが賄われている。

「應幡派下」の方は、現在「應二」には居住者がいないが、二つの家屋には位牌がまだ安置されており、祖先祭祀が続けられている。現在、二つの庁とも毎日の祭祀と掃除は特定の族人によつて行われている。節句の際には、そこに住んでいる者が自費で供物を用意して祭祀を行う。

「應幡派下」のへ應幡公嘗とへ冠恵公嘗へは、現在二つとも同一族人によつて管理されている。前者は、土地が

昔の五、六甲から現在の四分余り（一分〓〇・一アール）になった。年間収入が少なくなった今、この資金からその二つの庁の祭祀と掃除をする族人の給料（一年合わせて八〇〇台斤）と毎日の祭祀費用を賄うのに精一杯である。赤字が出た場合には、後者の「冠恵公嘗」から埋めあわせがされるものの、「冠恵公嘗」にも五分の土地しか残っていないので、大した収入があるわけではない。

「愛塘偉芳公」も二派に分かれていますので、それぞれ紹介する。「偉芳派下」の方は、元の家屋に居住している子孫は四つの「房」に分かれています。一ヶ月ごとに「房」を単位として交代に毎日の祭祀をする。責任者は自費で祭祀用品（線香あるいは蠟燭など）を用意して祭祀を行い、掃除もする。責任者ではなくとも祖先に対する愛着から毎日自発的に訪れる者もいる。節句の時は、その住民全員が祭祀に訪れ、その時の供物は各世帯が自ら用意する。

「偉芳派下」の祭祀公業組織「偉芳公嘗」は植民時代ですでに解散した。残ったのは墓の土地だけである。

「廣玉派下」の方は、伝統的な家屋の数是一个のままであるが、現代風に増築されている部分がある。現在、毎日の祭祀は、そこに住んでいる各世帯から少なくとも一人が祭祀を行う。旧暦の毎月一日と十五日と節句の際には、その住民全員が祭祀に訪れる。これらの祖先祭祀は、各世帯が祭祀用品と供物を用意して行うが、それぞれの祖先

の誕生日と命日に、その子孫が祭祀に行く時は、所属している祭祀公業組織が祭祀の費用を提供する。

「廣玉派下」の祭祀公業組織「清元公嘗」と「廣玉公嘗」は現在二つとも同一の族人によって管理されている。前者に残った土地五、六甲の収入から墓参りの費用と、前述した祖先の誕生日と命日の祭祀費用が出される。そしてその年にお金が残った場合は、「房」の原則に従って分配される。以前にあつた奨学金あるいは男を産む奨励金は、今ではもう無くなっている。後者の「廣玉公嘗」には、現在二甲余りの土地がある。その収入が全て「房」の原則に基づいて分配されている。

「愛塘偉鵬公」には「瑞玉派下」と「清期派下」があるが、その内「瑞玉派下」では、以前からの家屋に居住している子孫がそれぞれ三つの「房」に属している。毎日の祭祀は、三つの「房」が「房」を単位として一年ごとに交代にするシステムである。節句の時、その住民の各世帯が、それぞれ供物を用意して祭祀する。正月には、他所に移住した子孫も帰って来て一緒に祭祀を行う。

「瑞玉公嘗」は現在一甲くらいの土地を所有し、その収入はすべて毎日の祭祀費用に使われているが、それでも半年分くらいの祭祀用品（線香、蠟燭など）の費用にしかならない。不足分はその責任者が自ら賄っている。

「清期派下」の方も、そこに残っている子孫はそれぞれ

三つの「房」に属している。毎日と節句の祭祀については、「瑞玉派下」と同じ方法をとる。毎日と節句の他に、自分の父親や祖父の誕生日あるいは命日に祭祀に行く者もいる。

「清期派下」の「へし清期公嘗」は現在、部屋と土地を所有しているが、一・七甲の土地しか残っておらず、地代からの年間収入は二万円くらいである。その収入は、家屋の維持にかかる費用（電気代、税金など）と毎日の祭祀費用を賄うのに精一杯である。天災などの原因で庁が壊れた場合は、「房」の原則に基づいて各世帯に修理代を請求する。

子孫の数が最も少ない結合集団である「北塘聲棟公」の場合は、数年前に、以前の唯一の伝統的な家屋を取り除き、現代的な四階建ての建物を建てた。それでもその四階に祭壇を設立して祖先祭祀を続けている。居住している年長の女性が代表として毎日一人で行なう基本的な祭祀である。節句の時だけ、世帯全員（五人）が供物を用意して祭祀する。「北塘聲棟公」には以前と同じく祭祀公業組織がない。

(二) 祠堂レベルの宗族組織について

現在、祠堂における毎日の祭祀と掃除は、特定の族人に任せられている。旧暦の毎月一日と十五日は、その住民も一緒に簡単な、供物無しの祭祀する。祠堂の住民にとつて、そこは全族人の祠堂でもあり、また自分の庁でもある。一年に二回行われていた共同的な祭祀（春祭と秋祭）は、

第二次世界大戦の間中止されていた。一九六一年に再開されたが、一年に二回から「春祭」一回に減った。この段階では、以前と同様にほとんどの族人が訪れ、儀式も整い、供物も豊富であった。祭祀が終わってから、以前と同じように、供物を調理して皆に振舞われ、その際、管理人によつて一年の収支が報告されていた。しかし一九六五年頃から再度中止になった。次に再開するのが一九七六年で、その時から祖先祭祀ではなく、全族人に随時記念品（毛布、コップセット、魔法瓶程度のもので）を配る形になった。

このように見てくると「し氏宗祠」での祖先祭祀には、平日の簡単な祭祀と年に三回の節句の供物付きの祭祀の二種類しか残っていないことになる。前者は特定の族人あるいは住民に任せられ、後者は後述の管理委員会のメンバーによつて行われている。最初は、五溝水に居住する委員全員が訪れていたが、次第に二人か三人だけが祭祀に行くようになった。このうち二人は祭祀の責任者で、一人は委員会の会長、つまり昔の管理人のような人であり、もう一人は監事兼委員である。彼らは供物を用意して簡単な祭祀をするだけである。供物は大体一回一〇〇〇元くらいで、一九九九年の中元節の際、筆者が見たものはビール五本、鶏一匹、豚肉一塊、肉の腸詰一本、缶詰二本、インスタントラーメン二つ、烏賊一匹、芋餅一塊であった。毎年三回の祭祀の供物は、大体その程度だという。中元節は元々旧暦

の七月十五日であるが、皆自分の家の祭祀も行わなければならぬため、祠堂の方が一日早めに行われ、しかも仕事が始まる前の朝六時に行なわれる。以前であれば、祖先祭祀の他にも、結婚などの時に祠堂へ報告に訪れたが、現在では行われていない。

次に通称「大嘗」と呼ばれた宗族結合レベルの祭祀公業組織を見てみる。一九七〇年頃、管理委員会が発足して「大嘗」のすべてを管理している。委員会の成員は、管理人一人、監事兼委員二人、会計兼委員一人、委員四人、合わせて八人である。会計兼委員を除くと皆七〇歳以上である。

この祭祀公業の財産のうち、土地の部分は、昔の六十何甲から現在の十何甲かに減って、地代による収入に大きな影響を与えた。インフオーマントによると、時代が変わった現在、共同的な祭祀をしても訪れる人は少なく、供物で作った料理も、現代人には以前ほどの価値がなくなってしまうている。そのため、昔と同じことをやれば資金を無駄に浪費することになるという。その点、記念品ならば買ってからいつでももらいに來てくれるので、浪費にならない。このような理由で、一九七六年の時から記念品を配ることにしたという。とはいえ、そのような日常用品の記念品も現代の人にとって価値があるものではないので毎年買う必要がない、という皆の意見から随時、配るようになった。

代わって費用が割かれたのが、祠堂の維持である。歴史のある古い建物をきちんと保存するのは難しく、費用もかかるのである。ここには「氏族人の祠堂に対する誇りが伺われる。筆者の調べた事例によれば、建物の保存状態がよいので、政府が文化財にする計画もあった。しかし、族人は、文化財になればもう自分達のものではなくなるし、「大嘗」に保存できる財力がないわけではないと考え、断ったという。この祠堂は、「氏族人にとって宗族の素晴らしい歴史を現すシンボルであるようだ。

また萬禰郷の人にとってもこの祠堂は地元のシンボルであるといえる。現在ここは一種の名所になっている。例えば、新聞や雑誌にしばしば「氏宗祠」についての記事が記載され、貴重な伝統的建築物などと賞賛されている。また、他の所の「氏宗族、政府団体、地方団体、学術団体、萬禰郷の姉妹郷からの訪問団体、古い建築物に興味を持っている人々などが見物あるいは写生に訪れる。族人も祠堂のことを熱心に説明する。他に結婚の記念写真をとるために訪れる夫婦もいるようである。

祠堂は五溝水の「氏祖先を祭祀する場所だけでなく、様々な機会に利用されている。例えば、屏東県の農具展览会、県長の県政説明会、萬禰郷の懇親会、萬禰郷のフオーグダンス大会、五溝村の村民大会、五溝水「氏族人の披露宴、祠堂に住んでいる住民の葬式など、祭祀とは関係なく

利用されているという。

「大嘗」は、このような祠堂の維持と保存に全力を尽くしている。「大嘗」の収入は毎日の祭祀費用とそれを行う族人の給料（一年五〇〇台斤）以外、そのほとんどが建物の維持に充てられている。古ければ古いほど維持にかかる費用が高くなるからである。もちろん昔のような奨学金はすでに中止されている。そうした状況にありながら、管理委員会は去年の九月（一九九九年）に、L氏の歴史を紹介している大理石の石碑をつくって祠堂の前に置くことにした。祠堂を見物に訪れる人々もつとL氏の歴史を知らせたためである。

（三）L氏宗族と五溝村の社会関係

分析にあたつて、「村落」という語の定義付けを明確にしておくが必要である。瀬川氏の説に従つて暫定的に示しておく。「村落は社会的単位であり、その点で単なる景観上の家屋のかたまりである「集落」とは区別されなければならない」（瀬川一九九一・九六―九七）。

中華民国政府は全国の行政単位を規定しなおして、自然村の五溝水を行政村化し、「五溝村」とした。この五溝村には、外部に対して政治的に代表する村長とリーダーたちの合議機関である「村辦公室」の組織があり、また民間的にその生活環境を向上させるための「五溝社区発展協

会」という組織がある。「村辦公室」は政治的組織であり、上位にはたたくさんの政府機関が控え、村政の実施などは政府の政策に従わなければならない。一方の「五溝社区発展協会」は、民間の自発的組織であり、村民自身の力を合わせて村の環境保全に努めている。ここには「社区環境保義工隊」と「社区守望相助隊」があり、前者が村の美観を保つことを目的とし、後者が村の治安の維持にあたる。またこの他にも「社区讀書会」があり、村民の知識を増やし、親子関係、婦女問題などについてのコミュニケーションの機会を提供している。皆が積極的に参加するため、共同の話題ができて村には活気が溢れている。つまり「五溝社区発展協会」は村民の精神的な憩いの場を提供していると言える。この二つの村落組織によって、ほとんど村民の生活上の問題を解決できるようである。

こうした地域の変化に対し、現在のL氏宗族は以前とは全く異なった役割を担うことになった。前章で見たようにL氏宗族はこの村で一番大きな宗族であり、昔は政治、経済、社会などの諸側面でこの村に大きく影響を及ぼす力を持っていた。確かに現在も政治上ある程度の力を持っていると考えられるが、現代社会でこれを行使すれば公私混同になる。そのため地方の村政などに干渉は行われず、日常的なレベルで宗族に関する事だけに用いられている。以前と異なり、L氏宗族は目だった存在ではなくなり、村の枠に

うまくとけこんでいると考えられる。現代では宗族間の争いが不要になっていることもその原因の一つかもしれない。また社会構造が変化することについて、今の「大嘗」の管理人は、昔のような族長の地位を失って、単なる名義上のリーダーに過ぎないようになった。現代の社会ではその程度の管理人で十分なのかもしれない。

五 小括と展望

宗族組織での祖先祭祀については、庁での祖先祭祀の变化は著しくないが、祠堂での祖先祭祀がほとんどなくなってしまったことが分かった。元来、宗族組織は祖先祭祀のために生まれた。そのため祖先祭祀活動の有無は、その宗族組織の存続に関わる。つまり現代社会において、祖先祭祀がほとんど見られなくなった祠堂レベルの宗族組織は、庁レベルの宗族組織に比べ生存し難いと予測される。

確かに急激な人口移動の結果、現在では、以前のように父系関係者が集まって住むことが少なくなった。祭祀公業組織の力も低下し、若者の間で伝統的な觀念が薄くなってきた以上、祖先祭祀は以前のままに維持されるとは考えられない。ただ、祠堂に比べ庁はより身近な存在であり、庁での祖先祭祀は、祭祀公業組織のお金に頼らずに自分のお金でも維持できる。そのため祖先祭祀の習慣化という形

で、庁レベルの宗族組織は残ると考えられる。そして、このように祭祀を続ける限り、伝統的な祖先崇拜の考え方のものは残り、族人を結びつけると考えられる。伝統的な祖先崇拜の考え方を支える庁レベルの宗族組織が残ることは、漢民族が自らの出自を意識しつづける上で重要な働きをすると考えられるのである。

では祠堂レベルはどうか。祠堂レベルの宗族組織は、社会的な勢力誇示など、光復までは政治的な意味から必要とされていた。そうした基盤が失われた現在、「L氏宗祠」に組織されたL氏宗族は、現代社会に順応して、この保存状態が良好な建築物自体に価値を見出した。その結果、「L氏宗祠」からは、祭祀が行われる場としての性格が薄れ、代って地域共同体で利用される機会が増えた。

つまり現代社会では祠堂レベルの宗族組織が存在する意味がなくなり、建物としての祠堂が、ある種の地域文化の一形態として捉えられるようになってきた。このことは、L氏の所有している建物が、他者に対して、伝統的な客家文化のイメージを可視化させる機能を持つようになったことを意味する。この地域の行政も「客家文化」が重要な観光資源であることは十分に認識している。

また民間の組織「五溝社区発展協会」が以前の宗族組織にとって変わった。そのため以前であれば、緊密であったL氏宗族の族人と宗族組織との関係も稀薄になり、むしろ

村という共同体にそのまま組み込まれたように見える。

これらの状況は、太田氏の主張する「文化の客体化」の例にあたる⁽¹⁾。祠堂を中心として、L氏宗族だけではなく、五溝村の村民全員が客家文化を操作の対象として客体化し、そのプロセスにより生産された文化を通して自分のアイデンティティを形成しようとしているのだ。そして、こうした文化の客体化を促す社会的要因の一つが観光なのである。

観光現象は、現代社会を分析する際に極めて示唆的な事例を多々提供する重要な研究領域の一つである。今日、世界のグローバル化とともに、社会の境界は薄れ、文化は社会の境界を越えて享受されている。そうした中で、伝統的な文化表象は一方で断片化しながら、他方ではとりわけ観光というコンテクストの中で再構築される。今後、観光がどのような形で展開され、どのような社会的、文化的影響を与え、それに対してホスト社会（観光客を受け入れる社会）がどのような対応をするかを見極めなくてはならない。ホスト社会の一員であるL氏の宗族組織がどのように影響されるのかをフィールドワークによって検証する必要がある。

註

- (1) 序に関しては [Maurice Freedman: 1958]、祠堂に関しては [末成道男、1988: 42] を参照。

(2) 本稿では、この宗族史に依拠しつつ、その他の文献や族譜などの民間伝承資料、筆者自身の現地調査の結果などを参照して五溝水の事例分析を行なった。

(3) 族譜における「世」は、日本語で言う「代」にあたる。愛塘と北塘は日本語でいう字にあたり、第七世の二人の祖先の別名である。インフォーマントが來台祖による結合宗族集団を区別する際に用いていたので使用した。

(4) これは祭祀されている位牌の中央部に書かれた名前によって分けたものである。当地の人は普通支派を区別する際に、このような呼称を用いているので、筆者もそれに従うことにした。同じように他の宗族も扱うことにする。

(5) 中国の科挙で登用した官吏名の一種である。

(6) 郷レベルの秀才に受かったが、県レベルの挙人に落第した人が、地方政府の薦めで国からもらった肩書きである。

(7) 重要な節句とは大体の場合は旧暦の大晦日、新年、端午節、中元節のことを指す。

(8) 一般の祠堂と異なつて、この祠堂には住んでいる子孫がいる。

(9) この頃にはまだ族人たちの中にも祖先祭祀活動に関心を持つ者が多く、訪れる人も多かった。一〇〇人以上の人が集まつたという。

(10) 詳しくは陳銘福（一九九四・二五・六）を参照。

(11) 詳しくは太田好信（一九九三）を参照。

参考文献

Freedman, Maurice, 1958 *Lineage Organization in Southeastern*

China. (London) [末成道男・西沢治彦・小熊誠訳『東南中国の宗族組織』弘文社、1991]

1966 Chinese Lineage and Society. (London)

『田村克己・瀬川昌久訳『中国の宗族と社会』弘文社、1995』

植野弘子、一九八九 〈台湾漢人社会の祖先祭祀〉『祖先祭祀』(渡辺欣雄編、凱風社)

末成道男、一九八八 〈「家祠」と「宗祠」——二つのレベルの祖先祭祀空間〉『文化人類学5』(アカデミア出版社)

牧野巽、一九四九 〈広東の合族祠と合族譜(一)(二)〉『牧野巽著作集第六卷』(御茶の水書房、一九八五)

瀬川昌久、一九九一 『中国人の村落と宗族——香港新界農村の社会人類学的研究——』(弘文社)

太田好信、一九九三 『文化の客体化——観光をととした文化とアイデンティティの創造』『民族学研究』五十七卷4号

陳其南、一九九〇 『家族與社会——台湾和中国社会研究的基礎理念』(聯經出版社・台北)

莊英章、一九九四 『家族與婚姻——台湾北部兩個村落之研究』(中央研究院民族学研究所・台北)

何国強、一九九九 〈広東三個客家村社の宗族組織之發展與現狀〉『民族学研究資料彙編第14期』(台北)

銭杭、一九九八 〈当代中国農村宗族聯宗的性質、過程及其变化趨勢——对浙江省平陽県陳姓聯宗的考察〉『華南農村社会文化研究論文集』(莊英章編、中央研究院民族学研究所・台北)

邱永章、一九八九 『五溝水——一個六堆客家聚落實質環境之研究』(台湾東海大学建築研究科修士論文)

謝繼昌、一九八四 『仰之村的家族組織』(中央研究院民族学研究所・台北)

陳銘福、一九九四 『祭祀公業實務』(書泉出版社・台北)